

ON AIR

NO. 117

放送大学通信 オン・エア

発行月 2015年2月

発行 放送大学

〒261-8586 千葉市美浜区若葉2-11
043-276-5111(総合受付)



CONTENTS

学習センター所長座談会	1
特別対談「女優と心理学」	5
学生の声「先生と私」	8
面接授業紹介	10
研究室だより	12
学習センターだより	13
2015年度開設改訂科目紹介	14
退任のごあいさつ	18
インフォメーション	20

学習センター所長座談会

ICTと学び

筑和 正格 北海道学習センター所長(ドイツ文学・都市文化論)

酒井 善則 東京渋谷学習センター所長(情報通信工学)

林 正則 大阪学習センター所長(ドイツ語学・文学)

司会
森本 容介 准教授(教育工学)



(左奥から)森本 容介准教授、酒井 善則所長、
林 正則所長、(テレビ画面)筑和 正格所長

放送大学では、オンライン授業やUPO-NET、Web会議システムなど、さまざまな“学び”の場面でICT活用が進められています。そこで東京渋谷、大阪の両学習センター所長にお集まりいただき、またTV会議システムで結んで北海道学習センター所長にもご参加いただき、森本 容介准教授の司会進行のもと、座談会を開催いたしました。テーマは「ICTと学び」。放送大学におけるICT活用の現状と課題について議論していただきました。

※本文中は敬称略とさせていただきます。

森本 本日はお忙しい中、ありがとうございます。早速、座談会を始めさせていただきます。まず、放送大学のICT活用の現状に対してどのようなご認識をお持ちでしょうか。

酒井 授業のネット配信が進んでいますが、現在のICTの活用には、講義をいかに面接授業に近づけるか、という観点が強すぎるように思います。確かに面接授業には、先生と学生、学生同士の相互理解が深まるという良さがありますが、一方で教育の質が

先生の能力に左右される、受講する学生一人ひとりの進捗度に合わせた講義が難しい、といった欠点もあります。私は、そもそも講義に先生の“顔”は絶対不可欠だろうかとさえ思っており、CGとかを使ってコンテンツをうまく伝えられないか、ICTをもっと導入すれば学生一人ひとりに合わせた速度での理解が進むのでは、と考えています。ですからオンライン授業には、面接授業を追いかけるという発想ではなく、独自の視点からICT活用を考えるべきだと思っています。

林 ICT活用は時代の趨勢であり、放送大学の発展を図る上でとても重要である、ということは言を俟ちません。が、放送大学の現状を考えると、ICT化をいま強引に、あまりに急激に押し進めることが果たして放送大学にどのようなメリット、デメリットをもたらすのか、という点は慎重に考えなければいけない。一般の大学もこぞってICT化の推進を謳っているわけで、放送大学もその競争に晒されていま

す。そうならば放送大学の固有性は何かを考えることが肝要で、それは放送大学の持つ全国ネットワーク、全都道府県にある学習センターだろうと、私は思います。酒井先生のご発言に反論するようですが、むしろ各学習センターをより充実させる、そのためのICT活用を議論すべきだろうと考えています。

筑和 両先生のお話を、北海道学習センターは自ずと中間的な位置づけにならざるを得ないな、との思いで伺いました。北海道の場合、特殊な地域性があります。非常に広域で、交通網が緻密ではない。そのため移動に非常に時間がかかる。そこで、移動せずに学習できるという点では、ICT活用はとても有効です。北海道学習センター所属の学生数は大阪学習センターとほぼ同じです。学生数の総人口比は北海道の方が多いため、それだけ遠隔授業へのニーズが高いと言えます。でも全て遠隔授業だけでよい、というわけではありません。学生の方々は、先生と対面することを本当に楽しみで面接授業を受講しています。そのやりとりを見ていると、伝統的な面接授業は保持することも一方では重要だと思っています。

面接授業へのアクセス性を高めるために

森本 筑和先生、北海道ではTV会議システムを使った遠隔授業を2009年から数多く実践されています。学生の方々の反応はいかがですか。



筑和 正格所長

筑和 地域で受講した学生の満足度は非常に高いものです。授業のコンテンツに対する評価もさることながら、圧倒的に多いのは交通費と時間がかからないという経済的・時間的理由です。そこで、今後はコンテンツの質

をより高めるために、双方向性をさらに強化することを目標にしており、札幌からTA（Teaching Assistant）を派遣するなどの工夫をしたい、と考えています。

森本 どの位の学生が申し込まれていますか。

筑和 10数名～30名というところですよ。主会場となる札幌は、今学期50名規模の会場がすぐに定員オーバーとなりました。主として私が講師を務めています

ですが、問題はそのために講義の内容が限定されるということです。このシステムにも脆弱な点が皆無ではないので、大事をとって私が担当するのですが、その結果、講義する分野が限られ受講生の数が一定程度以上は広がらない、という現状があります。

酒井 渋谷学習センターでも同システムを使った講義へのニーズは大きいと思います。特に、地方から受講されている方には。ただ、筑和先生のご指摘通り、扱いにやや難があります。私が以前いたNTTの研究所ではTV



酒井 善則所長

会議システム専用の部屋があり、部屋の電源を入れた瞬間につながるようになっておりました。今はいちいち設定しなければならない。結構面倒くさく、つながっても途中で落ちたり、と扱いにくさは否めません。画像や音がちゃんと届くということも大事ですが、利用者に余計な負担をかけずに使えるようにしないと普及しないのでは、と思います。

森本 放送大学ではこれまで5年ほど同システムを運用してきましたが、3回に1回くらいは授業が中断するようなトラブルに見舞われています。現在、パソコン上で行うWeb会議システムへの移行が進んでおり、同じようなトラブルは少なくなる筈です。

林 大阪では北海道のような地理的制約はないので、TV会議システムで結んで講義する、という必要性を必ずしも感じておりません。ただ、教室の制約で希望する面接授業を受講できない方が大勢いますので、センター内の複数の教室を同システムでつなぎ、希望者全員が受講できるようにする、という工夫があつていいかなと思います。

情報リテラシーを高めるために

森本 放送大学ではTV会議システム以外にも、放送授業のインターネット配信、UPO-NET、Web通信指導などのICT活用を行っていますが、私がいちばんネックだと思っているのが、情報リテラシーの問題です。若い学生の方はパソコンやスマートフォンを問題なく使っていますが、放送大学では学生の年齢層が高く、なかなかそのようにはいきません。

林 私が学習センターで日常的に接している学生の



多くは、60代以上の方々です。その方々はこれまでインターネットに触れた機会も少なく、ネット環境の必要性をあまり感じておられない。当然、ネットのスキルも充分ではありません。しかし、学ぶことが楽しいからと、

学習センターによく足を運んで来られる。この思いは大切にしなければいけませんね。こうした方々に勉強方法を尋ねると、一様に「まず教科書で勉強する」と言われる。TVやラジオ、インターネットはどうですかと伺うと、「あくまで教科書の補助だ」と。将来、教科書がなくなるかもしれないと言うと「それは困る!」です。そういう状況が現実にあるわけです。ですから、教科書に代わるものをパソコンでダウンロードしてなどというのは、この方々には難しかろうというのが実情です。仮にそういう授業を行うのであれば、学習センターにパソコンの操作方を指導する専門職員なりチューターなりを配置してもらわなければ、とてもセンターでは対応できないと思います。

酒井 基礎科目「初歩からのパソコン」の面接授業を見ていつも思うのは、パソコンに触れたことがある人とそうでない人の開きが尋常でないことです。等しく指導しても理解度に10倍ほどの差が出ます。学生が実際に手を動かしてみる、それでも理解できなかったらその場で教える。パソコン操作というのは、分からないものは1時間モニターに向かっても分からない。聞けば1分で分かる。そういう実践を繰り返して自分のものにしていけないといけません。では、そういう人たちが大勢学習センターに来所した時に対処できるかという、現状ではとても無理です。情報リテラシーの充分でない学生の方々のための環境づくりをどうするか、という点はもっと議論されてもよいと考えます。

筑和 私もお二人と同意見です。高齢者だからICTは無理と決めつけるのではなく、…「機械いじりの楽しさ」と言うと言語弊があるかもしれませんが、そういう、パソコンに触れる楽しさ、というものが日常的な体験として提供できれば、もう少しパソコンに親しむ方も増えるのかな、という気はしています。

パソコンもある程度コツが飲み込めれば後は自分で、という部分があるので、その入口の部分を実日常的に支える仕組みがあればと思っています。

森本 放送大学は“誰でも”学べるため、学生の情報リテラシーを統一するのが難しいのですが、先ほどのTAなりチューターなりを配置するというのはいい考えだと思います。海外のOpen Universityでもチューター制度を推し進めている大学があります。

林 パソコンに触れる機会を増やすことですね。人気の高い心理学実験の授業はだいぶ増えましたが、そういうパソコンを使う授業はもっとあっていい。

森本 「初歩からの～」の最後に行うアンケート結果を情報コースの三輪先生は追跡調査されていて、せっかく覚えたスキルも使わないとどんどん忘れていく、と。ですから、1回受講するだけではなく、何回も受講する。そういう意味では、パソコンに触れる授業を増やす、というのはポイントだと思います。メインとなるコンテンツと併せてパソコン操作についても付属的に学べる、例えば画像処理の方法のついでにパソコン操作が学べるといった授業がもっとあるといいですね。



森本 容介 准教授

使い分けが肝要、ICT活用

筑和 eラーニング教材のUPO-NETは、大学での学習にスムーズに移行できて便利だなとの印象を持ったのですが、周知が不十分なのではと感じるときがあります。

森本 実はUPO-NETは結構使われており、放送大学の学生でログインされた方は2万人弱、全学生数が約8万人ですので4人に1人が利用されています。特に人気のある教材は「PC入門」で3千人位。英語では「TOEIC®スタート」、高校の数学が学べる「リメディアル数学」も2千人以上です。

筑和 卒業をめざす方にとって、外国語の単位をどう修得するか、は大きな問題です。特に、学校での勉強から長い間離れていた高齢者の方には。結局、面接授業の適当なものを選んで履修する例が多いようですが、UPO-NETの英語で事前学習すれば科目の選択の幅が広がる、と思います。

林 その方々は圧倒的に教科書派です。また、ご自宅に自分“専用”のパソコンをお持ちの方も多くはない。教科書からインターネットへの…例えば教科書のここが理解できなければネットのどこそこで調べれば答えに行き着くといった導きの仕組みがあるといいですね。そうするとパソコンとの馴染みもできてくる。ところで、今後作られる予定のオンライン授業では、教科書はなくなるのでしょうか。

森本 基本的にはそうだと思います。映像を見て電子テキストを読み、小テストに答えて課題を提出する、それらをすべてパソコン上で行うことになります。自分の好きな時に再生して。でも、確かに“紙”の方がいいというのも分かります…。

林 私には“紙”に書かれた文字とモニター上の文字とは違う、という意識が拭い切れません。辞書も同じで、書き込みや手垢にまみれて自分の辞書が育っていく、“学び”も深まっていくと、常々学生に言っています。

酒井 ワープロが世の中に出た頃、こんなもので文章が書けるか、と思いました。当初は手で書いたものをキーを叩いて入力してました。でも今は逆で、手書きの手紙を出す時など、モニター上で文章を作りそれを手で写しています。時代とともに価値観は変わります。

林 確かにそうですね。絵画や音楽にしても、半世紀も前の人間ならデジタル再生された複製の鑑賞にはおおいに懐疑的だった。でもデジタル化が進み複製は精巧になるし、何度でも鑑賞できる。結果、理解がより深まるということにもなる。こうしたICT化による価値観の変遷は、これからいろいろな分野で起こってきます。しかし一方で、デジタルだけではだめだ、という感覚は残して置かないと。音楽で言う「倍音」——耳には聴こえないが心には届くといった、デジタル化できない情報もあるのだという感性は大切にしたい。

酒井 昔聞いた話ですが、バリ島の民族音楽ガムランには人間の可聴周波数以上の音がいっぱい入っている、でもそれが脳のアルファ波を増大させる、というのですね。ですから、聴こえる聴こえないだけでは判断できない。講義も同じで、先生の迫力といった感性に訴えるところは、モニター上ではうま

く伝わらない。でも普通の説明のところは先生の“顔”は不要で、むしろICTと結びつけた方が効率的です。このようにICT活用できるところ、できないところを使い分けて考える必要があります。

森本 講義のテーマによってもICTに向く向かないはあると思います。「プログラミング」の授業などはオンラインでも問題ない。対話を重視するものか、知識習得に重点を置いたものなのか、講義のスタイルでの使い分けも大事です。

■ デジタルデバイドの解消に向けて

林 先ほどのデジタルデバイドの問題もあります。年齢層や地域間格差だけではなく。障害を抱えた方、低所得のためネット環境を整備できない人もいます。そういう情報弱者と言われる方たちへの手当てをどうするか。この人たちを切り捨てる放送大学であってはなりません。

森本 総務省の情報通信白書によると国民の5人に1人がネット環境にありません。

筑和 北海道では、まだネット環境の不備な地域が結構あります。放送大学から全国的なネット環境の充実を国に働きかけるといったことも必要かと。それから、“誰でも”には中間の現役世代の方々も含まれます。この方々は、大学4年間だけの知識だけでは社会の最前線で活躍する上で足りないものを感じて放送大学で勉強している。忙しくて学習センターにはとても行けない。こういうサイレントマジョリティの方々の声なき声に耳を傾けたプログラムなりを提供する義務があると思います。

酒井 同感です。15～64歳でカウントする労働人口はどんどん減り、やがて社会は立ち行かなくなります。これからは70歳、いや75歳まで労働人口にカウントされなければ社会を支えられない時代が来ます。自ずと大学や社会で学んだ知識だけでは足りなくなってきました。そこにきちんと対応するのが放送大学の役目だと思います。

森本 話は尽きないのですが時間が来てしまいました。私はICT活用推進派の立場ですが、皆さんのお話を伺っていろいろな課題が浮き彫りになったように思います。本日はどうもありがとうございました。

女優と 心理学

湖月わたるさん × 星 薫 准教授
(女優、元宝塚歌劇団星組トップスター) (認知心理学、認知加齢研究)

湖月 わたる(こづき わたる)さん
1989年、宝塚歌劇団に入団。
94年「若き日の唄は忘れじ」で
新人公演主演、97年「夜明けの
天使たち」で初主演。宙組、専科
時代には「エリザベート」「ベル
サイユのばら」「風と共に去り
ぬ」などで多彩な役を演じる。
2003年2月星組トップスターと
なり、お披露目公演「王家に捧ぐ
歌」(アイダより)では文化庁芸
術祭優秀賞を受賞。05年日韓
国交正常化40周年記念「ベル
サイユのばら」で韓国公演を成
功に導く。06年退団後は女優と
して舞台を中心に幅広く活躍。



2012年に教養学部「心理と教育コース」を卒業された女優、湖月 わたるさん。放送大学で学ばれた「心理学」は女優活動にどういう影響を与えたのでしょうか。星 薫 准教授との対談の様を、誌上にてお伝えします。

※本文中は敬称略とさせていただきます。

星 本日はたいへんお忙しい中、ありがとうございます。お近くで拝見して思わず…まあ何と格好いい！さすが女優さん、と感動してしまいました。

湖月 ありがとうございます。

星 早速ですが、お話を。そもそも湖月さんが心理学を学ばれようと思われた理由は何でしょうか。

湖月 私は中学卒業と同時に宝塚に飛び込みました。その時に父と“通信教育で高校卒業資格を”の約束を交わしたのですが、入団後はそれどころではなくて…そこで退団を決意した時に再チャレンジ、ようやく“約束”を果たすことができたのです。ところが、卒業してみると今度は大学というものに心動かされました。大学ってどんなところだろう、社会に出る前に皆さん何を学ぶだろう、と。そんな折り、父は現役をリタイアして放送大学大学院で学んでおりました。そして、とてもイキイキと放送大学について語るのです。そこで私も行ってみようと。コース選択には私も迷いましたが、なぜか「心理学」の3文字が気になって…。宝塚という集団の中で個々の能力を結集して芸術を創り上げる、役を演じることを通していろいろな人格になる、そういう「集団」と「個」の関係、演じる上での人間の心の働きというものに関心があったことから心理学に惹かれたのだと思います。

星 それにしても私が感心するのは、学生の多くの方々が臨床心理学に興味を持たれるのに、湖月さんは計量心理学とか心理学研究法とかをきちんと学ばれています。普通は皆さん、避けて通る科目です。

湖月 科目案内を見て心理学にもいろいろあることが分かったのですが、内容もわからないままこちら履修しておいた方がいいのではと、ところが取って見たらとても難しく、正直、消化不良のまま終わってしまった科目もあります。でも、一つの分野の学問を多面的に学べたことはとてもいい経験になりました。ところで面接授業ですが、倍率が高く申し込んでも外れてしまったことがありました。“心理学実験”とかとても興味があったのですが…“実験”というのはどういう授業ですか。

星 それは申し訳ないことをしました。心理学実験というのは、他の面接授業のように先生の講義を学生が聴く、というものではなく、仲間同士で一つの実験を行います。先生の出番はあまりなく、後のデータ処理まで仲間と一緒に。皆さん喜んで参加されています。普段は一人で学ばれていますから、余計楽しいようです。ところで、心理学を学ばれて湖月さんの女優活動に変化がありましたでしょうか。

学問が身近に。役作りに役立った心理学

湖月 まず、学問ってすごく身近なものだな、と思えるようになりました。例えば、発達心理学者エリクソンの、人の一生を乳児期から成熟期まで8つに分け、人はそれぞれの時期にアイデンティ



ティを確立させながら発達するというライフサイクル論。とても興味深く、自分自身のことを振り返るいい機会になりました。この時期にこういうことを経験したから今の私はあるのだな、と。人に対しても、特に人間関係がうまくいっていない人にも同じように当てはめて考えると、その人の背景にあるものが分かって納得できたり。おかげで人間関係を形成していく上でとても役立っています。入学前はちょっと距離感のあった学問でしたが、今は私の生活の中に息づいていると感じています。社会も違った角度で見ることができるようになりました。

星 迷惑をかけられたり嫌な思いをさせられたり、ということが私たちにはしょっちゅうある訳ですが、相手には相手の事情があったと分かれば、途端に腹立ちが収まる、相手を許すことができる、そういうことはとても大事だと思います。相手を想像する材料を与えてくれる、それが心理学というもので、人間関係が良好になったり要らぬ争いを避けることにつながります。

湖月 その“想像する”ことは、役作りにも役立っています。宝塚時代に男性役を演じていた時は、こうしてもらったら女性は嬉しいんじゃないかといった観点から男性像を作り上げていました。もしかしたら自分の理想を注いでいたのかも知れません。退団後は、男性役ばかりではなく女性役も演じていますが、ほとんどが幼少期に問題を抱えた大人の役。親の愛情が足りなかったり家族との別れがあったり、そのために自立できなかったり挫折したりと、トラウマのために無意識に起こしてしまうこととか、その人間の過去や心の深奥にまで深く考えながら演じるようになりました。台本から離れたところまでも、想像の翼を広げて。そういう、演じる上でプラスになることは、舞台仲間にも伝えていけたらと思っています。教養として、あるいは趣味の一環でもいい、心理学に触れることはすばらしい、と。

星 ありがとうございます。後輩の方々が続かれるといいですね。もう一つ伺いたいのですが、湖月さんはファンの方々ととても大切にされていま

す。心理学を学ばれてから何か変わりましたでしょうか。

以前にも増して、コミュニケーションを大切に

湖月 阪神大震災の時、まだ宝塚時代のことですが、街は壊滅状態。交通網は遮断され、瓦礫の街を人々はリュックを背負って行き交っていました。幸い劇場はすぐに修復し公演にこぎつけることができたのですが、こんな時に演じていいのだろうか、の思いは正直ありました。でも、その背中を舞台へと押してくれたのが、ファンの方々からのお手紙でした。公演が始まるのがとても嬉しい、どんな手段を使っても観に行く、と。そして観終わった後に、自分は感動することができると気づかされた、震災以来初めて笑った、と。そういうお言葉を頂戴して、お腹がいっぱいになった訳でも手にモノが残った訳でもないけれど、エンターテインメントにはこういう力があつたんだと気づかされたのです。人と人とが同じ空間を共有して与え与えられる力というのはすごいな、と。それ以来、演じることに対する考え方や取り組みが変わったように思います。

星 舞台の力、ですね。どのように変わりました？

湖月 1対1で心のケアをしている訳ではないのですが、往きよりも帰りの方がきっと心の温度は1、2度上がっている、舞台を通してお客様にそんな元気を与えていけたらいいなと思うようになりました。そして心理学を学んでからは、ファン・ミーティングの時などにファンの方々一人ひとりに私の思いが伝わるように、限られた瞬間ではあるけれどその人との出会いを胸に刻もう、と以前にも増して意識するようになったのです。家族に対する姿勢も変わったように思います。「カウンセリング」と名前のついた科目では、相手の話を聞くことの大切さを学びました。両親とは15歳の時から離れて生活していますが、3年前に父が他界して母は一人です。会わなくてと思うのですがなかなか時間が取れなくて…メールには「大丈夫よ」とあっても、いざ電話してみると声が暗かったり。そんな時にはいろいろ話をして、電話を切る頃には互いに笑い



合えるようにと心がけています。そういうコミュニケーションの大切さにも気づかせてもらいました。このことは、ファンを大切にする、ということにも通じていると思います。

星 ファンの方々にとっても、湖月さんの宝塚退団は大きなニュースだったと思います。退団は、皆さん同時にされるのですか。

湖月 宝塚を退団するのは個人の意志で決められます。ですから、一度舞台に立てて充分と、1年でやめる人もいます。憧れだけで入団したけれど、やはり自分には向いてはいない、と結婚を選択する人もいれば、新たな目標をみつけてその途に突き進む人もいます。歯医者になった人もいます。

星 それこそ、「私は誰か？」—アイデンティティ確立の時期ですからね。

湖月 そうですね、皆が自分に問いかけ続けた時期でした。その結果、40人入って10年経って残ったのは私を含めて10人ほどでした。実は宝塚は100周年を迎えましたが、未婚女性だけの集団で100年貫き通した歴史というのはとても重いものだと思います。しかも、どんどん世代交代して若い力を採り入れながらリフレッシュしていく。確かに退団するというのは大きな決断でしたが、このシステムのおかげで私は新しい世界に踏み出すことができました。宝塚という誇りを胸に新たな人生を歩み出す—そういう意味では大きな宝物をいただいたと思っています。放送大学で学ぶ機会も頂戴できましたし、そのことで私はさらに変わることができました。

二度目の入学を視野に

星 何年か前に調査したのですが、放送大学の“学び”によって自信を得た、という答えが随分とありました。特に女性の方に。大学を出ていない負い目とかいろいろ引きずっていたけれど、放送大学で学ぶことでふっ切れた、自信が持てたと。

湖月 私もその一人ですね。

星 学ぶことには限りがないので、知識が増えたといってもまあ数センチぐらいのもの。自信の本質は、

一つは成し遂げたという達成感、もう一つは知識そのものを得たというのではなく、“学び”の道筋を得た—何か知りたいことがあればこうすればいい、といった道筋が分かった、ということだと思います。

湖月 その通りですね。皆さん、何か自信のようなものを漲らせてイキイキと学ばれていらっしゃいました。私にとっては皆さん、人生の大先輩。しかも自分の仕事場では出会うことの少ない方たちと出会えて本当によかったと思っています。障がいのあるお子さんをお持ちのお母さんは、だからどうしても学びたいんだ、と。第二の人生、無為に過ごすより楽しく学んだ、とキラキラしている男性の方も多くいらっしゃいました、私の父のように。

星 そう、“やめられない止まらない♪”人たち…気軽に始めたけれど、始めてみたら止まらない。

湖月 本当ですね。ですから、私ももう1回行きたいな、と思っています。

星 ぜひ。お仕事がお忙しいから大変でしょうけど。そして次は卒業研究にもチャレンジを。

湖月 卒業研究を選択するかどうかは、本当に悩みました。

星 大学の“学び”でいちばん大切なことは、先生から教わるものを受け身で学ぶことではなく、自分で学ぶということ。それが卒業研究で、自分で一つの課題をみつけその答えを手探りで探す。そして、自分なりの一つの結論に到った時の達成感、喜びは、単位認定試験に合格した時のものとは格段に違い、確実に得るものがあります。ぜひ、挑戦を。

湖月 放送大学は初めての体験で、とにかく卒業を、という勢いだけで学んだように思います。でも二度目となれば、もっと有効的に学べる気がします。本当に興味あることにじっくり腰を据えて。そんな勉強の仕方もいいのかな、と今では思っています。

星 本日はどうもありがとうございました。明日からの公演、応援しております。

湖月わたるさんは現在、「2015年4月入学生募集」のテレビコマーシャルに出演しています。放送大学ホームページの[動画チャンネル]→[大学情報]→[CM、スペシャルメッセージ]からご覧いただけます。



先生と私



生活と福祉 コース 石丸昌彦 教授



今年の石丸先生の卒業研究ゼミは、4月から11月まで、毎月1回文京学習センターで行われました。ゼミ生は、生活と福祉コースと心理と教育コースの学生8名、東京近郊だけでなく、遠方から参加するゼミ生もいました。今年のゼミの特徴はなんといっても、卒業研究期間に2名が出産し、1名は間もなく出産ということでした。小さなお子様も参加する微笑ましい回もありました。

ゼミは、各自のテーマについて自由に発表し、石丸先生とゼミ生からコメントをもらう形で進められました。準備不足

心理と教育コース/東京足立学習センター 高山 知子



の時も先生からの励ましのお言葉をかけていただき、ゼミの帰りは毎回元気を付けてもらって帰りました。

私の卒業研究のテーマの「働く人のメンタルヘルス」も他のゼミ生のテーマと少しずつ重なる領域がありました。毎回、新しい発見もあり、ゼミを重ねて打ち解けてゆくうちに、8人分の卒論を履修したような気分になりました。卒業研究は4月の開始から11月初旬の提出、12月初旬の口頭発表までの期間が短く、論文提出、口頭発表用の準備は辛く、くじけそうになりましたが、石丸先生とゼミ生のおかげで乗り越えられました。どうもありがとうございました。

心理と教育 コース 星 薫 准教授



星 薫先生の卒研ゼミは月1回文京学習センターに集まり指導を受けるのですが、全国各地から集まった学生は皆、高い問題意識をもって研究に取り組んでおられます。私は「楽しそうなので参加しましたあ」などととても言い出せないまま、あっという間に9月になり、「月一ゼミは終了、あとは各自で研究を深めて論文に」と言われ、俄かに焦りだしたことはここだけの秘密です(笑)。

調査結果をグラフにまとめ先生にメールしたところ、「興味深

心理と教育コース/群馬学習センター 大井田 ゆかり



い結果が出ましたね。お会いして相談しましょう」と遠路はるばる高崎までお越しいただき個別指導を賜り、これは何が何でも論文を仕上げなければ申し訳ない、とようやく火がついてからは超高速で書き上げました。

今年度は修士論文を執筆される院の先輩方のご厚意で統計の勉強会があったり、院ゼミとの合同合宿があったりと、星ゼミは卒研からのスピノフが超豪華で知的探求心を刺激されることばかりで、やはり素敵な先生のもとには素敵な方が集まるのだなぁとしみじみ感じ、素晴らしい出会いに感謝しております。

社会と産業 コース 高橋和夫 教授



今は昔の話ですが、高橋和夫先生と初めてお会いする前に抱いていたイメージは「TVでよく見る人」であり、画面の中の遠い世界の偉い大先生といったものでした。

中東という分野の世間的なイメージと相まってきっと怖いのだろうなぁと思いつつも、実際にゼミに所属することになり、恐る恐る周囲を見渡して見ると、激しく自説を戦わせている先輩達の中で、先生はニコニコしながらそれを聞いており、ほどよいところで議論をまとめ、各人の

社会と産業コース/山形学習センター 吉田 亮太

論文の方向性について穏やかにコメントをされていました。それでは、とばかりに自分もゼミの輪に飛び込んでいき、かんかんがくがく侃々諤々の激論を楽しんでい

たところ、数年後の今も変わらず国際政治について先生に親身に指導していただいている自分がいました。

ゼミ後の飲み会で先生から聞ける世界各地のディープなお話も魅力的な高橋ゼミ、よろしければぜひ門を叩いてみてください。きっと高橋先生は歓迎してくれますよ！



放送大学はTV、ラジオ、ネットのバーチャルな場での講義に加えて、
面接授業やゼミなどリアルな場での学びが沢山あります。ここで、生の先生の「ひと」と「なり」、
「見識」に直接触れ、感激される学生が多いようです。いくつかを紹介します。

人間と文化
コース **青山昌文** 教授



青山先生は普通の先生では無いのです。それは面接授業や教材の画面から飛び出してくるもの凄いオーラで、学習センターでも話題になりました。私は神学校で学んでいた若い時に、世界中に大きな事業を起こし(学校経営と病院経営です)、何千、何万人の修道者と学生を率いた方に指導されたので、直ぐに分かりました。青山先生はその事業家の司祭に、風貌とその方に負けないようなオーラが良く似ているのです。

先生の卒論指導は厳しいもので、まるでライオンの子育てのようでした。でもその厳しさは学問に対する厳しさだったの

人間の探究専攻/群馬学習センター **和田 好**



です。本当は先生は繊細で優しい方です。私は自分から進んで四年間の卒論指導をお願いしました。一、二年は術後の体調と資料集めで大変でしたが三年目、四年目は"なんと素晴らしいことか"と学問の醍醐味を体験しました。ゼミは人生の中で一番幸せな時間でした。

学問は資料を読み込んで行く内に、その世界に入り、芸術家の求めた世界に導かれ、芸術家の魂に触れるようで、超越した高いアイデアの世界の感動を味わいました。

青山先生はそのような指導をして下さる先生です。また、青山先生の卒論、修論に集まる方の中には日本を代表するような方が多かったのも驚きでした。

情報コース **仁科エミ** 教授



私は心理職を目指し放送大学で学んでおります。一時震災復興案件に従事し休学しましたが復学し、今では大学院の事で悩む毎日です。

私は「音と音楽への情報学的アプローチ」を紹介致します。この講義は脳科学や音楽、情報と難易度は高いですが、ガムランの演奏などもあり楽しめると思います。特に音楽経験の少ない方が16ビートを刻めている事に驚き、音楽は専門家にしか出来ないと言う自分の考えを改めようと思いました。

心理と教育コース/千葉学習センター **長田 大和**



他にも実験があり私は民族楽器を持ち込みましたが、多種多様な楽器が揃った事は放送大学らしさだと思います。今後のハイレゾ(高解像度音源)の普及の為にも学内外を問わず広く受講して頂きたい講義だと思います。

放送大学には学問の自由がある。全ての人に幅広く学ぶ機会がある。そして何よりもこの分野を切り拓いた仁科教授の講義が受けることが出来る。これは本当に幸せな事だと思うのです。元音楽家の私も楽しめました。

先生はちょっとした音楽の質問にも答えて下さいますよ!

福岡学習
センター **大槻恭一** 客員教員
(九州大学大学院農学研究院教授)



私の卒業研究は、九州大学大学院教授であり放送大学福岡学習センターの客員教授である大槻恭一先生に指導していただきました。

研究テーマは『宅地を利用した畑作における土壌物理性の研究』ですが、研究を始めた当初、土壌物理に関する私の予備知識はほんのわずかしがなく、研究の進め方について先生には一から教を乞うような状態でした。

幸い、私の居住地が先生の勤務地の近くだったこともあ

自然と環境コース/福岡学習センター **大久保 留理子**



り、先生の多忙な時間の合間を縫うような形でかなりの回数の面談をしていただくことができました。また、クラウドを利用した論文の修正指導、スカイプによるプレゼンの指導など、地の利とネットの両方を生かした丁寧な指導を頂き、なんとか無事に研究を進めることができました。

私の卒業研究が完成したのは先生の多大なご協力あったことだと大変感謝しております。この貴重な経験を糧に、今後も研究テーマを深めていきたいと思っています。

面接授業への誘い

—地域学習センターいきいき授業—

面接授業は、全国の学習センターで年間約3,000クラスを開講しています。中でもユニークな面接授業をいくつかご紹介します。

全国の面接授業 ①

福島学習センター

福島の現状と復興のための課題

FUREは3.11の震災直後に設置、福島大学内の兼務者と学外からの招聘専任スタッフ60名余で構成され、現場密着の復興支援事業に携わってきました。このリソースを放送大学の面接授業に活用することを企画し、講師を依頼して実現した第一弾です。もちろん福島学習センターでは、講師依頼の際には福島の特性を加味した授業内容をお願いし、いくつかの授業でそうした内容を積極的に取り上げていただいています。これは文字通り真っ向から災害復興に寄与する授業という位置づけです。今回は、初沢氏が総論を、河津氏が放射能理解と測定法の実際を取り上げ、来年には農業の再生をテーマに第二弾を予定しております。

さて、今回の授業で受講生は、行政の対応の遅さや情報不足を改めて感じたとか、もっと専門的知識を生

担当講師/福島大学うつくしまふくしま未来支援センターFURE
初沢 敏生教授(経済地理学)、河津 賢澄特任教授(放射線測定)
実施日/2014年11月29日・30日

かした復興の進め方を考えるべきだとか、さらに、実際に放射線を目で見たり測定して、あやふやな知識だったがよく理解できたとか、自然界にも思いの外放射線が存在していることを初めて知ったなど、感想を書いています。総じて、一般市民が正しい知識を持つことの重要性に気づいたことがこの授業の成果と思われます。この授業が最後で卒業という人は、測定実験を取り入れるなど一番印象に残る授業だったと書いています。(森田 福島学習センター所長)



全国の面接授業 ②

滋賀学習センター

景観探偵学入門—街歩きの極意

「〇〇探偵団」といったとき、その昔の「少年探偵団」を思い出されるかもしれません。いま「建築探偵」「街並探偵」「歴史探偵」「山城探偵」など、たくさん名探偵が街角にあふれているようです。

本講では「景観」を探偵してみることにしました。私たちが街に出るとき、目の前には街並がひろがり、高いビルから普通の住宅まで様々な建築、高速道路から駅裏の路地まで色々な道路、公園・学校・駅など人々が集まる場所、それに近くの川から遠くの山まで私たちを取り囲む自然環境等々、たくさんのものが見えています。こういうものをまとめて「景観」といいます。日本の多くの都市では、明治からの近代化、そして戦後の急激な都市化の中で、景観は大きく変化してきました。いわゆる名所旧跡ではなく、何げない街角の風景や路地の姿に、その街がたどってきたエピソードが隠されています。路地裏の

担当講師/秋山 元秀(放送大学滋賀学習センター客員教授)
実施日/2014年11月8日・9日

曲がりくねった道が、昔は水路であり、それは江戸時代に周囲の田の灌漑に使われ、村境でもあったこと、今は途切れているけれども、きちんとした街区の中に斜めに走っている道が、実は古い街道の名残であり、今の商店街が昔の宿場町であったこと、など。こんな目で街を歩いてみるとおもしろいではありませんか。

このような問題意識をもって街歩きを一つの知的活動の分野として確立した先人たちを紹介するとともに、それをさらに応用して「景観探偵」を提唱します。実際の街歩き(今回は京都の古い街を歩いてみます)を通じて皆さんにも達人になってもらいます。





「姫路城」人と歴史

担当講師/中元 孝迪(兵庫県立大学特任教授)

実施日/2014年12月3日・4日

「お城」を見ると、まず目をやるのが、天守閣および周辺の建造物群で、その壮大で繊細な美しさに感動します。しかし、その城郭が、どんな人物によって、なぜそこに建てられ、どのような歴史を刻んできたのか、といういわば“お城の周辺情報”については、意外に関心が薄いのが実情です。この面接授業では、①「播磨の地政学的位相」で姫路に有力城郭が建つ必然性、②「姫路城前史」で赤松時代から黒田官兵衛、羽柴秀吉に至る城の様子、③「池田輝政の移封」で世界遺産となる現姫路城を築いた輝政の人物像、④⑤「姫路城の美と構造」で建築美の分析、⑥⑦「城下町の繁栄」で近世大都市の様子と多彩な人物往来、⑧「城主論」で日本最多の城主となった背景—などについて学びました。建物というハードの側面に加え、歴史、人物、まち、文化といったソフトの側面も含め、総合的、多角的な観点から検証することで、初めて「お城のすべて」が理解できるのだということを学ぶ講義でした。

受講者の感想

・姫路城は今、平成の大修理や大河ドラマ「軍師官兵衛」の放映により注目されているが、古墳時代

からの播磨の歴史や人物など楽しく学べて、改めて姫路城に関心を持った。

・姫路城を単なる建築的な側面からしか見ていなかったが、今回の講義で、姫路城がなぜこの地に、またどうしてこの様な美しい城を築いたのかなど、多面的に理解できた。

・各方面から深く研究されている先生の講義を直接お聞きし、有益な受講でした。豊富な資料やデータを示していただき、体験に基づいたお話も多く、始めから終わりまで楽しく聴講させていただいた。



沖縄のまじないと民俗

担当講師/山里 純一(琉球大学法文学部教授)

実施日/2014年11月29日・30日

いつの世でも、また、世界中どこでも、人々は災いを免れ、不安や不幸のない平穏な生活が送られるよう絶えず願っています。しかしながら時として、病気や死、天災・火事・農作物の虫害など、さまざまな災厄は、こうした人々の願いを打ち砕き、生活を脅かします。そうした人々に災厄をもたらすと考えられたヤナムン(悪霊・悪鬼・厄神等)を退け、ヤナムンから身を守るための行為がまじないです。まじないは、現在も私たちの生活の隅々に様々な形で見られますが、時代の流れによって変容ないしは消滅しつつあるものもあります。

講義では、いくつかの民俗事例を通して、呪文(ジンヌモン)・呪歌、呪力があると信じられた物体(呪物)や文字や記号が書かれた呪符などについて、講師による民謡を聴き、写真や映像を見ながら沖縄のまじないについて学んでもらいました。

受講者の感想

・ヤナムンを退け、ヤナムンから身を守るための行為がまじないで、それには呪文・呪歌・呪符などがあるということがよくわかった。

・講義内容はほとんど初耳だったが、レジュメやビデオ、また三線も駆使しながら講義をしていただいたおかげで、理解と興味がかなり深まった。

・たくさんの事が簡素化されつつある現代に比べ、昔は当たり前のこととしてやっていた風習には、その一つ一つに意味があり、すごく神秘的に思える。神や霊の存在を純粋に信じ、それらに対する方策として生まれたものが「まじない」なのかもしれないと感じた。





3年目の研究室

社会と産業コース・社会経営科学プログラム 教授 梅干野 晃

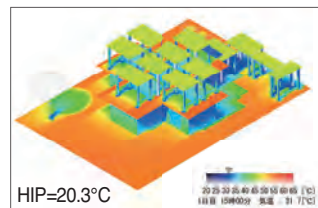
放送大学に着任して、3年が過ぎようとしております。今年度から、「都市・建築の環境とエネルギー('14)」が開講され、今年は「環境の可視化('15)」の収録に追われております。

専門は、都市・建築環境工学、環境設計・計画です。環境負荷の小さい快適な街づくりを目指して、光・熱・空気・水環境などを中心に生活環境に関する研究を行っています。ヒートアイランド対策、都市・建築緑化、クールスポット(街の中に涼しい生活空間をつくる)に焦点を当てて、3DCADによる熱収支シミュレーションを行い、これらの研究成果をもとに、街のあるべき姿を提案したいと思っております。研究の具体的な内容についてはホームページ(hoyano-lab.com)をご覧ください。

ゼミの雰囲気は、和気あいあいと、しかし議論は厳しく、論理的にストーリーを持って情熱的な発表を motto にして、毎月1回土曜日一日かけて幕張の放送大



3DCADシミュレーションを用いた建築の熱環境解析に取り組んでいる小林さん、中島さんとOBの森谷さん



HIP=20.3°C
PVパネルを取り込んだ住宅の解析例

学本部で開催しております。皆勤賞の方もおられます。

地方の方はWeb参加で頑張っておられます(できるだけ千葉で参加していただけると嬉しいのですが)。ゼミ発表は、研究発表だけでなく、話題提供や近況報告に分けて、お互い、幅広い話題で刺激し合っています。ゼミの後速やかに、発表内容、ゼミ中の討論や次の作業の内容等をゼミメモとして提出してもらい、これにコメントを付けて返信し、ゼミの再確認をしています。研究の作法を体得していただきたい。きっと将来が開けるものと信じております。

Hard Funなゼミを目指して

情報コース・情報学プログラム 教授 加藤 浩

私の専門は教育工学で、とくに協調学習の支援の手法やツール、および評価について研究をしています。教育工学という分野は、非常に学際的であり、情報学、数学、計算機科学、社会学、心理学、哲学などさまざまな学問領域の知識が必要になります。その経験のおかげか、学生の修論のテーマも教育はもとより、サイエンスコミュニケーションから船舶通信まで多彩ですが、いろいろな人の力を借りながらも、なんとか指導をしています。

私が専門としている社会文化的学習理論の中に正統的周辺参加という理論があり(詳しくは「eラーニングの理論と実践('12)」第9回をご覧ください)、それによると学習は個人の頭の中で起こることではなく、学習者がコミュニティに参加してアイデンティティを確立していく過程であるとしています。私もそういう学習観ですので、研究ゼミというコミュニティへの参加を重視しています。ゼミは月に1回、可能な人は対面で、遠隔



Web会議と対面によるゼミ風景

地の人はWeb会議システムで参加してもらっています。その他にも、私の研究室にゆかりのある人びとが自主的に集まるゼミを毎週金曜日の夜に行っており、時間が許す人にはそちらにも参加してもらっています。研究は楽しくないとやる意味がないと考えていますので、ゼミでは、楽しく自由闊達な意見交換ができる雰囲気を大事にしています。「たいへんだけれど楽しい」ことをHard Funといいます。それを目指して研究室を運営しています。

奈良学習センター

奈良県奈良市北魚屋東町(奈良女子大学コラボレーションセンター3階) 〒630-8589
近鉄奈良駅から北へ徒歩約10分 電話:0742-20-7870



学習センター外観

奈良学習センターは青丹よしと詠われた緑深い古都奈良の東大寺、興福寺(世界遺産)まで歩いて10～15分の奈良女子大学(本部)構内にあります。

放送大学の学生の皆さんも奈良女子大学の美しい構内にある食堂や図書館(総合情報センター)を良く利用されています。

奈良学習センターには、現在約920名の10代から80代までの幅広い年代の学生が在籍しています。東大寺や正倉院、平城京や纏向遺跡など奈良が持つ文化遺産などを題材に開設される面接授業は、遠くの学習センターからも参加されるなど好評で、学生の皆さんは本来の「学び」である学ぶ喜びを感じながら熱心に学んでおられます。

また、センターには客員教員が配置され、毎月一度のゼミを開催しているほか、客員教員や所長がそれぞれの専門分野に近い内容を中心に学生の皆さんの学習支援に当たっていますし、センターに置かれている9つのクラブや同好会、そして同窓会などが学生の皆さんの楽しい交流の場として利用されています。さらに、素晴らしい放送大学を少しでも多くの人たちに知っていただけるよう、平城京などテーマを決めて開催される一般公開講演会や公民館等での講演会も行われ、地域の方々との交流の場ともなっています。

最後になりましたが、明るく前向きに接する素晴らしいセンター職員の方々が学生の皆さんの学びを支えていることも奈良学習センターの大きな特長となっています。



一般公開講演会の様子

大分学習センター

大分県大分市野田380(別府大学大分キャンパス内) 〒870-0868
JR大分駅よりバスで約30分 電話:097-549-6612

大分県は九州の東端に位置している。古くから海上交通が発達し、関西や四国との交流や、海外との貿易が盛んだったため、新しい物好きな気質の県民が多い。関サバ・関アジをはじめとする海の幸、シイタケやかぼすなどの山の幸、別府・湯布院をはじめとする温泉の数々と温暖な気候で、生活するには最高のおおいた県である。



学習センター外観

大分学習センターはJR大分駅、別府、湯布院のいずれからも車で40分の所に位置し、別府や湯布院の温泉宿に宿泊して面接授業を受けに来られる

学生もいる。学習センターは別府大学大分キャンパスの敷地内にある。1階の大部分は学生食堂が占めている。近くにコンビニもないため来所する学生にとっては安くてうまい昼食が食べられるので喜ばれている。食堂の社長のこだわりで、本場長崎より麺を仕入れ

て創る「ちゃんぽん」と、ドリップで1杯ずつ入れてくれる「珈琲」がお勧め。

平成24年度から地域貢献と放送大学の認知度向上を兼ねて、公開講演会を県立図書館と看護協会とのそれぞれの共催で行っているが、受講生の10%以上の方が入学している。また、学生満足度の向上や学生間の交流促進のため、年間を通じて多くの行事を行っている。テニス大会、ゴルフ大会、グラウンドゴルフ大会、ボウリング大会、ビアガーデンでの納涼会、湯布院で山菜を採取し、料理して食べる



食味の会(餅つき)

食味の会、忘年会等、学生同士で世代や職業を超えての交流が盛んになっている。

今年度、開設20周年を迎えることができたが、これからも生涯学習機関として、地域に貢献していきたい。

グローバル化と私たちの社会('15) 基礎科目

放送大学教授 (社会と産業) 原田 順子 放送大学准教授 (社会と産業) 北川 由紀彦



原田 順子
教授



北川 由紀彦
准教授

テレビ、ラジオ、新聞、インターネット、さまざまなメディアで「グローバル化」という言葉を目にします。私たちが日々接しているあらゆる現象は、グローバル化の影響を被っています。“グローバル化に対してどのように向き合うべきかを一人一人が考えるべき時を私たちは迎えているのではないか”——そうした問題意識から、社会と産業コースの専任教員が共に知恵を絞り、この問題について議論する科目を全員で開設することになりました。

グローバル化に向き合うためには、広い視野に立っ

て、さまざまな学問分野の議論に目配せをしておくことが重要です。そのためこの科目では、様々な分野からグローバル化について論じています。この科目がきっかけとなって、自分がもともと関心をもっていた分野だけでなく、隣接する分野にも興味を抱かれることを願っています。難易度については、それぞれの分野の初学者が無理なく学べる水準にしたつもりです。ぜひ受講してみてください。

人格心理学('15) 共通科目

京都大学准教授 (放送大学客員准教授) 大山 泰宏



大山 泰宏
客員准教授

ラジオ科目「人格心理学('09)」を6年間開講してきましたが、2015年度からはテレビ科目「人格心理学('15)」となり再スタートです。人格心理学とは、「人格」すなわち個人の「人となり」を探究すると同時に、人間という存在そのものに関しても探究する学問です。この科目では、心理学の基礎知識を身につけるだけではなく、心理学が歴史や思想とどのように関連しつつ展開したのかということについても扱っています。

主任講師の大山は、京都大学で臨床心理学を研究し、臨床心理士をめざす大学院生たちの指導にあ

たり、また自らも、臨床心理士として活動していますので、「人格心理学('15)」は臨床心理学の色彩が強いものとなっています。複数の講師ではなく主任講師ひとりで、印刷教材の執筆、放送教材の制作をおこないましたので、一貫性のある緊密な構成となっていると思います。

テレビ科目ならではの豊富な映像資料を参照しながら、人間存在について探究するこの科目を、どうぞお楽しみに。

ヨーロッパの歴史I—ヨーロッパ史の視点と方法('15) 共通科目

放送大学教授 (人間と文化) 草光 俊雄 早稲田大学教授 (放送大学客員教授) 甚野 尚志



草光 俊雄
教授



甚野 尚志
客員教授

現代の歴史学はこれまでに多くの歴史家たちが築きあげてきた仕事の蓄積の上に成り立っています。歴史研究の対象は時代によって、また歴史家の関心のあり方によって変わってきており、また同じ対象を研究する場合でも、ある歴史家の見解に対して異なった解釈が提起されて論争が巻き上がるということがよくあります。いままで歴史家たちは過去をどのように理解しようとしてきたのか、また歴史はどのように書かれてきたのか、そのことを勉強することは、歴史学の重要な分

野にもなっています。そこで「ヨーロッパの歴史I」では、副題を「ヨーロッパ史の視点と方法」として、ヨーロッパ史研究における多様な視点を示し、それらがいかなる問題意識と方法で書かれてきたか、などについて広く講義することになりました。これまでの科目ではいわゆる通史的な授業でしたので、ややとまどわれるかもしれません。暗記ものではない「考える」歴史をぜひ学んで下さい。

英語で読む科学('15) 共通科目

放送大学准教授 井口 篤
(人間と文化)

放送大学准教授 大橋 理枝
(人間と文化)

「科学」(science)という言葉聞いて「自然科学」(natural science)を連想する人も多いのではないのでしょうか。しかし、scienceが自然科学を意味するようになったのは18世紀以降のことです。それまではscienceはより一般的に「知識、知ること」を意味していました。それもそのはず、scienceの語源をたどってみると、ラテン語のscire「知る」という動詞に行き着くからです。この科目では、21世紀において学ぼうとしている私たちが知っておきたい科学的な内容について英



井口 篤 准教授



大橋 理枝 准教授

語で「知る」ための一助となることを目指しています。各章では、宇宙物理学、脳神経科学、化学、量子力学などの分野の様々な知見について、専門家やジャーナリストたちが明晰な英語で語ってくれています。先端的な研究成果を反映させた内容があれば、割合古典的な内容のものも含まれています。この講義を通して、受講者の皆さんが英語でより広く「知る」ことの楽しさを味わっていただけたらと願っています。

生活環境と情報認知('15) 専門科目

放送大学准教授 川原 靖弘
(生活と福祉)

情報通信研究機構研究マネージャー 片桐 祥雅
(放送大学客員教授)

この科目では、情報機器上で操作されるさまざまな情報が、現実の世界のものからどのように造られていくのか、また、つくられた情報は私たちにどのような作用を及ぼすのか、といったことを、情報工学、神経科学、実験心理学、ロボティクス、医用工学、環境学といった幅広い分野の講師陣とともに、最新の研究事例を挙げながら解説しました。具体的には、生体情報から物理・環境情報に至るさまざまな情報を例とし、それらがいかに取得・加工・提示されるかといった情報処理技術に係わる事項と、どのように受容され認知されるかといった認知神経科学



川原 靖弘 准教授



片桐 祥雅 客員教授

的事項について述べるとともに、日常生活におけるどのようなサービスに繋がっているかという社会学的事項にも言及いたしました。また、リアルワールドにおける情報の心理学的・生理学的効果についても重点的に触れました。このような効果を利用することは、将来、限りある資源を有効に活用しつつ持続的発展社会の支援に資することが期待されます。

本科目を学ぶことにより、こうしたバーチャルワールドの裏に綿密なリアルワールドが存在していることをぜひ推察してください。

日本の教育改革('15) 専門科目

放送大学教授 小川 正人
(心理と教育)

放送大学教授 岩永 雅也
(心理と教育)

日本の教育は、今世紀初めから、世界的な産業構造の再編とグローバル化を背景に構造改革と言われるような本格的な改革の渦中にあります。

従来の日本の教育「改革」は、旧教育システムを前提に、漸進的な教育課程の改訂や学校制度の部分的見直しを積み上げるものでした。それに対して、現下の教育改革は、新学力観への転換による教育課程の改訂と共に、教育活動とその成果を誰がどのように適切に管理していくのかという教育の統治(ガバナンス)のあり方を見直すために、教育システム全体を改革しようとする特徴をもっています。端的に



小川 正人 教授



岩永 雅也 教授

言えば、①従来の知識蓄積型学力ではなくアウトカム型学力への転換、②そうした学力観の転換に適合した出口管理型の教育システムと教育行政手法の構築—教育(行政)現場への権限移譲と成果重視の評価システムの構築、③新学力観の転換に適合的な学校制度や入試・選抜制度の見直し等の一体的な改革として取り組まれています。本科目では、そうした改革の全体像と共に各学校段階の改革動向や課題を考えます。

本科目が、現代日本社会と教育を学習する受講生の一助になればと願っています。

自然言語処理('15) 専門 科目

京都大学教授
(放送大学客員教授) 黒橋 禎夫



黒橋 禎夫
客員教授

自然言語というのは、我々が日常用いている日本語、英語、中国語など、自然発生的に生まれた言語のことで、プログラミング言語のように人工的に作られた人工言語と対比させてこうよびます。自然言語のコンピュータ処理に関する学問分野、技術分野を自然言語処理とよびます。

自然言語処理の研究はコンピュータ(電子計算機)の誕生とほぼ同時期にはじまりましたが、言葉の複雑さ、多様性、曖昧性に苦しむ時期が長く続きました。しかし、インターネットの発達とともに電子テキストが爆発的に増加し、その大規模なテキストを活用してコンピュータが

言葉の使い方を学び、知識を獲得することが少しずつできるようになってきました。

今後、コンピュータが自然言語をよりよく理解し、誰もが特別な訓練なく使いこなせる自然言語インタフェースがロボットや情報機器に搭載され、人間の知的活動を支援する自然言語処理応用システムが社会に浸透していくでしょう。

本講義が、自然言語処理についての入門的な役割を果たし、みなさんが今後、自然言語処理システムを健全に利活用する一助となれば幸いです。

宇宙とその進化('15) 専門 科目

放送大学教授
(自然と環境) 吉岡 一男



吉岡 一男
教授

本科目は専門科目『進化する宇宙('11)』の後継科目として制作されました。宇宙は想像を絶する広い空間と長い歴史を持っています。現代の天文学は、その空間と歴史の全体を把握しつつあります。講義は、まず天文学の歴史から始まり、恒星、銀河、宇宙全体と順次スケールを広げて、それらがどのように進化して現在の形態をとるようになったかを学びます。ある程度の物理的・数学的知識をもとに説明しますが、じっくり取り組んでいけば、宇宙のすばらしい仕組みが見えてきます。

『進化する宇宙('11)』の主任講師の一人だった本学の海部先生が退官された後、私が一人で受け継ぎました。それを機に、分担講師の3人の先生方を別の先生方をお願いしました。その結果、新しい内容を盛り込むとともに、別の切り口で講義がなされています。それで、科目名も変え、再履修可としました。皆さんが本科目を履修して、星空を広い視点から眺めることができるようになればと思います。

暮らしに役立つバイオサイエンス('15) 総合 科目

岐阜大学教授
(放送大学客員教授) 岩橋 均

新潟薬科大学教授
(放送大学客員教授) 重松 亨



岩橋 均
客員教授



重松 亨
客員教授

バイオサイエンスは人類の歴史の中で、より豊かな暮らしを求めたときに始まった科学と考えられます。狩猟・採集生活から牧畜・農耕生活への転換がバイオサイエンスの始まりと考える事が出来るからです。バイオサイエンスを発展することのできた人々がより豊かな暮らしを享受できたと考えられます。そして、バイオサイエンスの中で重要な位置を占めるのが、微生物学です。約6000年前から人類は微生物を利用してきたと言われています。本講義では、微生物の定義、姿、環境に占

める位置を先ず学びます。さらに、味噌、酒などの醸造食品、抗生物質、化成原料などの有用物質生産、病原性大腸菌等による疾患、汚染物質の分解等の排水処理、遺伝子組換え食品など、様々な分野で微生物が我々の暮らしと深く関わっている事を学びます。「暮らしに役立つバイオサイエンス」を実感しながら、各人が微生物に対する理解を深め、各人の微生物に対する科学的概念の構築を目指します。

食健康科学('15)

放送大学教授
(生活健康科学プログラム) 小城 勝相

東京大学名誉教授、東京農業大学教授
(放送大学客員教授) 清水 誠

本科目は、ヒトの健康の基盤となる食の科学を論ずる。体内で起こる食品の消化・吸収・代謝はすべて化学反応である。ヒトは60兆個の細胞からなり、その1つ1つの細胞の中で起こる膨大な数の化学反応が整然と調節されていて初めて健康を維持できる。この事実から化学を理解しない限り食を理解することはできない。化学は敬遠されるが非常に簡単な原理から成り立っている。最初に分子の成り立ちを初歩から説明し、次に栄養素の構造と機能(栄養機能、嗜好機能、生体調節機能)を講義する。

さらに動脈硬化、糖尿病、がんなどのいわゆる生活習慣病やアレルギー／感染症の発症機構や予防について論ずる。この中で、体内の恒常性を維持するホルモンの作用機構を分子レベルで解説する。加えて、機能性を発揮する食品(特定保健用食品、機能性食品など)について講義する。最後に食品の安全性に関する問題と食環境の重要性を論ずる。以上、食の科学を基礎から学び、健康維持に役立てることを目標とする。



小城 勝相
教授



清水 誠
客員教授

海外の教育改革('15)

玉川大学教授
(放送大学客員教授) 坂野 慎二

筑波大学教授
(放送大学客員教授) 藤田 晃之

2000年に始まったPISA調査以降、世界各国の教育政策は、知識の「量」から知識の「質」を重視する方向へと変化しています。これは、知識基盤社会において求められる能力が、変化していることを示しています。各国の教育政策をみると、多くの国が他の国の教育政策を参考としながら、独自の教育政策を模索していることがわかります。PISA調査では、アジア各国やフィンランドが好成績を挙げました。逆にドイツのように成績がふるわず、「PISAショック」を受けた国もあります。本講座では、こう

した国際的な教育政策の動向を整理した上で、ヨーロッパ諸国、アメリカ、アジア諸国の動向を分析していきます。

各国の教育改革は、OECD、UNESCO、EUといった国際的な機関の教育情報を共有して進められています。PISA調査は、まさに義務教育段階の成果を測定して比較する「物差し」の役割を果たしています。各国は、そうした成果のために、卓越性(エクセレンス)の追求と、教育機会の拡大・平等を追求しています。



坂野 慎二
客員教授



藤田 晃之
客員教授

コンピューティング—原理とその展開—('15)

放送大学教授
(情報学プログラム) 川合 慧

東京大学教授
(放送大学客員教授) 萩谷 昌己

本科目の主題はコンピューティングです。世の中で行われている様々なタイプのコンピューティング(計算)すべての背景にコンピュータの存在があることは言うまでもありませんが、その威力を発揮させるには、与えられた問題を論理的に分解して基本的な解決手順に帰着させるという、いわゆる問題解決の手順が必要です。この手順は実用的な問題では極めて複雑なものになりますので、きちんと体系立った計算の理論の裏付けが必須なのです。

コンピューティングの源流は「計算とは何か」という問題への数学者の取り組みです。当初は純粋な数学の世界での話でしたが、コンピュータ能力の驚異的な発展によって、莫大な計算量を必要とする処理が現実的に実行可能となりました。そのことが更に新しい理論を生むという状況が進行してきています。本講義では、このように発展しつつあるコンピューティングの研究と実際応用とを、第一線の研究者のお話を含めて広い視点から概説します。



川合 慧
教授



萩谷 昌己
客員教授

大変お世話になりました

心理と教育 教授 住田 正樹
人間発達科学プログラム



10年間お世話になりました。非常に有意義な10年間でした。とくにゼミや食事会での学生との気軽な雑談がなかなか愉快で、かつ為になりました。ゼミには現職の先生方が多く、保育士、幼稚園教諭、小・中・高の教員、また専門学校や短大の教員、さらには大学教員もいて、学校教育制度に沿った教育現場を一通り網羅していましたからさまざまな有益な話を聞くことができました。私は教育社会学を専攻していますが、大学以外の教育現場の経験はなく、ただ屁理屈を並べ立てているだけで、その屁理屈が教育現場の問題を的確に捉えているという確証を得ているわけではありません。ですからその屁理屈が、雑談に出てくる教育現場の問題理解の深まりに沿ったものですと大いに気をよくして、問題理解への意欲をそそられたものでした。また屁理屈を越えた意外な事実が出てきますと密かに感心して大いに関心をそそられました。そういう意味でゼミは私にとってはまさに相互学習の場でした。大変いい機会を与えていただいたと思っています。10年間本当にありがとうございました。放送大学の一層の発展をお祈りいたします。

楽しかった30年

心理と教育 准教授 星 薫
人間発達科学プログラム



私が放送大学に着任した時、私の娘は生後4ヵ月でしたし、放送大学の方はまだ誕生もしていませんでした（学生を初めて迎え入れたのは、翌年の4月のことでした）。我が娘と放送大学とは、ほぼ同じ時期にこの世に誕生し、そして30年かけてここまで育ってきた訳です。娘は社会人になり、放送大学も、全国化、大学院修士課程そして博士課程の設立を経て、やっと1人前の大学になったというところでしょう。私はその様子をずっと見守り続けてきて今、親としての役割は、ほぼ卒業したと思えます。大学の責任の方も、まだ定年ではありませんが、そろそろ卒業させていただくことに致しました。

30歳という年齢は、人間なら本格的に社会の一員としてその責任を果たすことが求められる時期ですが、放送大学もまた、社会的責任を十分果たしていつてくれるよう、今後は外から応援し続けていきたいと思います。

大学の教育・研究とは

社会と産業 教授 高木 保興
社会経営科学プログラム



大学の教育・研究に関する考え方は、「学生へのサービス」や研究業績も含めて近年大きく変化してきた。昔の考え方から抜け出せない「老兵」は姿を消すのが得策のようです。学者として10年間放送大学に勤務したことへの自己評価は退職後ゆっくりと考えることにしたい。

現時点で、1つだけ確かに言えることがある。それは、大学院生とのゼミでの議論の中で、抽象的な開発経済学から現実に役立つと思われる開発論へと私の研究対象が変化したことは、私にとって大きなプラスだということである。前任校から教育・研究環境に大差がない大学に移っていたら、若い大学院生を前にして、これまでの研究スタイルを継続させていたことと思う。

一方で、今の私の開発論に、若い大学院生はどんな反応を示すのか知りたいところだが、これから機会があれば出かけて行って講義を試みたい。

放送大学の8年間

情報 教授 川合 慧
情報学プログラム



放送大学では、最初に自然の理解、次に人間の探究、そして最後の2年間は情報の各コースにお世話になりました。この間、情報コースの立ち上げのお手伝いとともに、5年目～7年目にはICT活用・遠隔教育センター及び教育支援センターに関する業務に関わらせて頂き、多忙ではありましたがとても充実した学園生活を送ることができました。科目作成は7科目でしたが、放送大学にふさわしいプロパーな情報関連の内容とすることができたと自負しております。また面接授業では、様々な年代の受講学生に対する講義を通じて、自分自身、情報概念のある部分をより明確化することができました。その間、沢山の教員と事務及び事務補佐の方々に様々な面でのご助力ご支援を頂き、心より感謝致しております。これからも、本来は抽象的な対象である情報について学ぶ際の、理解のために有効な手助けとなるようなものを形作ってゆければと思っています。皆さんどうもありがとうございました。

大変お世話になりました

情報 教授 尾崎 史郎
情報学プログラム



放送大学には、旧メディア教育開発センターの業務が移管された2009年4月に着任し、著作権関係の授業科目の作成、面接授業、大学支援などを担当させていただきました。その間、北海道から沖縄まで全国各地の学習センターでの面接授業や大学教職員向けセミナーの開催などを延べ百数十回行っており全国を飛び回った6年間だったという感じがします。その中でも特に印象に残っているのが面接授業です。法律関係の授業は知識伝授型で意見や質問も通り一遍になりがちですが、放送大学の面接授業の場合は様々な経歴をお持ちの学生の皆さんがそれぞれの実体験などに基づく具体的な意見を出され、熱心に議論されますので、私の方が教えられることも多く、実りある楽しい時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

教え、教えられ

自然と環境 教授 濱田 嘉昭
自然環境科学プログラム



これまで24年間、放送大学に勤務させていただきました。主任講師としては18科目の制作を担当しました。また、全国の学習センターでの面接授業を通じた多くの受講生の皆さんとの直接・間接の交流によって、貴重な声をいただきました。さらに、自然系のコースに属し、多くの先輩教員に教えられ、人文・社会系の優れた先生方とも親しく交流をさせていただきました。それらの結果は教材にも反映されていると考えます。放送大学では教員、学生、その仕組みを支える職員の協同で、優れた教材が不断に生み出され、活用されています。いまさら言うまでもなく、本学は、通常の大学とは運営基盤や、そこで学ぶ学生も違うし、教員の在りようも違ってきます。この独特の大学を媒介に、多くの人が結びつき、大げさに言えば、日本の文化・社会形成の重要な役割を果たしていると考えます。皆さんが誇りをもって、この貴重な仕組みをさらに発展させることを期待しています。最後になりますが、私たちの日常の環境を整えてくれた、補助の職員、清掃担当の皆さん、登下校に声をかけていただいた門衛・受付の皆さんにも感謝申し上げます。

放送大学の5年間

自然と環境 教授 米谷 民明
自然環境科学プログラム



この5年間、短くも充実した日々を送ることができたと感謝しています。主任講師として初歩から大学院まで物理関係の延べ7科目を担当し、印刷教材の執筆だけで1000ページを越えます。着任前はこれほどとは思ってもみませんでした。もう少し余裕を持てれば良かったのですが、私としては様々な制約の中で最善をつくしました。執筆に伴いそれまで直接接していなかった歴史的文献を渉猟したり、放送授業のためのデモ用器具を少年時代に戻った気持ちで工夫したりと、楽しみもありました。学習センターでの面接授業や公開講演会、また、大学院および卒業研究の指導では、多様な学生さん達と出会い、忘れ得ない経験をしました。担当した授業科目の意図をきちんと受け止めている学生さんが確実にいることを認識しましたし、重荷を背負いながらも真摯に勉学されている学生さんの姿には感動しました。これからも放送科目が続くので放送大学には関わりますが、しばらく「充電」後、5年間疎かになっていた専門の研究にも再び取り組みたいと考えています。



夏季集中科目の学生募集が始まります

広報課

夏季集中放送授業期間に「学校図書館司書教諭資格取得に資する科目」、「看護師資格取得に資する科目」を開設します。学生募集等の日程は下記のとおりです。

	学校図書館司書教諭資格取得に資する科目	看護師資格取得に資する科目
学生募集要項配布	2015年4月1日(水)～	2015年4月1日(水)～
出願受付期間	2015年5月1日(金)～6月7日(日)	2015年5月1日(金)～5月31日(日)
放送授業期間	2015年7月22日(水)～8月5日(水)	2015年7月22日(水)～8月5日(水)
通信指導提出期限	2015年8月14日(金)	2015年8月14日(金)
単位認定試験	2015年10月16日(金) (単位認定試験レポート提出期限)	2015年9月25日(金) 2015年9月26日(土) いずれか1日を選択

夏季集中科目の受講を希望する方は、大学本部広報課又は最寄りの学習センターまでご連絡ください。この要項はご連絡いただいた方のみに配布します。在学生が履修を希望される場合にも科目登録申請要項(夏季集中型専用)を入手して、必要な手続きをお願いします。

2015(平成27)年度大学院 文化科学研究科入学者選考結果

教務課

大学院修士全科生に386名、博士全科生に12名が合格しました。

[修士全科生]

プログラム名	生活健康科学	人間発達科学	臨床心理学	社会経営科学	人文学	情報学	自然環境科学	計
募集人員	90名程度	60名程度	30名程度	100名程度	90名程度	70名程度	60名程度	500名
出願者数	130名	97名	457名	96名	110名	64名	56名	1,010名
合格者数	72名	52名	30名	69名	62名	58名	43名	386名
倍率	1.8倍	1.9倍	15.2倍	1.4倍	1.8倍	1.1倍	1.3倍	2.6倍

※倍率は出願者数/合格者数

[博士全科生]

プログラム名	生活健康科学	人間科学	社会経営科学	人文学	自然科学	計
募集人員	10名					10名
出願者数	17名	23名	25名	25名	20名	110名
合格者数	12名					12名

編集後記

放送大学のオンライン化が急ピッチで進められている。オンライン授業だけでなく、放送大学の広報についても、「オン・エア」のインターネット版をはじめとして、放送大学サイトを通じてのお知らせが多くなっている。問題になったのが、「オン・エア」の紙版を廃止したらいかがか、という議論である。結論から言えば、紙版も継続しようということになった。理由が重要であると思った。オンラインには、新しいことをすぐ伝えることができるという「即時性」があるのに対して、紙媒体には「定期性」があるからだ。大学特有の暦があって、入学・授業・通信指導・試験など季節毎のお知らせがあり、学生・教員・職員全員の一致した予定調整がこれで行われるのだ。オンラインと共存しながらも、8万人以上の大学全体による同一性を定期的に保つという、紙媒体特有の役割があると考えられるのだ。(編集委員長・坂井素思)

ご意見やご感想をお聞かせください。メールアドレス editor@ouj.ac.jp

放送大学通信 オン・エア 編集委員(2014年度)

委員長	教授	坂井 素思
委員	教授	井出 訓
	教授	御厨 貴
	教授	青山 昌文
	准教授	岡崎 友典
	准教授	森本 容介
	准教授	安池 智一
オブザーバー	副学長	小寺山 亘
編集事務担当		総務部広報課



放送大学

<http://www.ouj.ac.jp/> ISSN 1343-3369